

＜ワークショップ報告＞

ワークショップI-A 「初年次教育の評価の方法を考える」

担当者 : 山田礼子(同志社大学)

概要 : 初年次教育の評価には、さまざまな方法がある。例えば、学生調査、授業評価、プログラム評価、ポートフォリオ評価等が代表的な評価法である。こうした方法のどれが適切であるか、どれが効果的であるかは学生の特徴やプログラムの性質によって異なると思われる。言い換えれば、多様な大学や多様な学生の存在により、適切な評価方法も多様であるともいえる。本ワークショップでは、参加者が自分の大学の初年次教育を通じて使用あるいは利用している評価方法を互いに紹介しながら、その特徴、利点などをより深く分析することによって、自分の大学に他の評価方法を取り入れていく可能性について考える過程としたい。

キーワード : 初年次教育, 評価方法, 学生調査, 授業評価, プログラム評価

ワークショップI-B 「協同学習の考え方と進め方」

担当者 : 安永 悟(久留米大学)

概要 : 近年、大学教育において協同学習の有効性が広く認められつつある。協同学習とは一般的なグループ学習とは違い、教授学習理論であり、理論に裏打ちされた学習技法である。学習仲間と共有した学習目標を達成するために、小グループやペアと一緒に学ぶことである。言い換えれば、小グループの教育的使用であり、学生が自分自身の学びと仲間の学びを最大限にするために共に学び合う学習法である。したがって、学生を小グループに分けただけでは協同学習に期待される本来の教育成果を得ることはできない。そこで、本ワークショップでは協同学習の理論的な背景や一般的なグループ学習との違いを理解し、大学の授業に協同学習を導入する際の具体的な方法や注意点をとり上げ、協同学習の簡単な技法を活用しながら、参加メンバーと共に体験的に学ぶことを目的とした。

キーワード : 協同学習, 大学授業, 構成的教授学習観, 大学適応, 学習スキル

ワークショップI-C「総合的な初年次教育プログラムを編成する」

担当者 : 杉谷祐美子(青山学院大学)

概要 : 本ワークショップは、昨年度に実施したワークショップ「総合的な初年次教育プログラムを開発する」の続編にあたる。いまや、日本の初年次教育は「第2ステージ」を迎え、具体性を帯びた多くの課題を抱えるなか、初年次教育の多様なコンテンツを整理し、より効果的な教育内容・方法を精選したうえで、総合的なプログラムの開発を求める声大きい。本ワークショップにおいては、昨年度の参加者から提案された初年次教育の到達目標やコンテンツを整理し、総合的な教育プログラムの特性を示した。そして、アカデミックなスキルだけでなく、意欲、態度など学生の人格的成長にも配慮されているプログラムについて、KYT, すなわち Keep(これからも続けるべき良い点), Problem(今後改善が必要な問題点), Try(問題点への対策を含めて、これからやってみたい点)をグループ・ワークで検討する試みを行った。

キーワード : 初年次教育, 教育プログラム, コンテンツ, 総合的, 開発

ワークショップI-D「実行性・実効性のある初年次教育を実現する」

担当者 : 菊池重雄(玉川大学)

概要 : 形態こそさまざまだが、いまでは多くの大学が初年次教育を導入し、そのなかには他大学の模範となる優れたプログラムや実施組織をもつ大学も少なくない。その一方で、学長や学部長が示す初年次教育のビジョンを、現場の教員は適切に受け止め、自らの教育的使命として実践しているといえるだろうか。研究志向や自分の城意識が強いといわれる教員が納得して初年次教育を実践しているといえるだろうか。初年次教育のビジョンやプログラムがどれほど優れたものであっても、また組織体制がどれほど堅固に構成されていたとしても、現場で働く一人ひとりの教員が納得して、能動的・積極的・創造的にかかわらない限り、初年次教育の果実を豊かに実らせることはできない。本ワークショップでは、ともすれば性善説でとらわれがちな教員観(この人たちならうまくやってくれるだろう、やってくれるはずだ)を批判的にとらえ直し、実際に機能する初年次教育の体制をつくるにはどうすればよいかを、「ミドル・アップダウン」と「フェア・プロセス」の二つのマネジメント・ツールを紹介しながら参加者とともに考察した。

キーワード : 初年次教育のビジョン, 初年次教育の現場, 実際に機能する組織,
ミドル・アップダウン, フェア・プロセス

ワークショップⅡ-A 「初年次教育における教職協働」

担当者 : 足立 寛(立教大学)

進行 : 田中 岳(九州大学)・神保啓子(名城大学)

概要 : ワークショップのもともとの意味は「作業場」「工房」である。本ワークショップでは、初年次教育をすすめていくうえでの教職協働という課題に、参加者全員で取り組んでもらった。知識伝授型ではない双方向型のスタイルを体感してもらいながら、課題解決を探っていくことが目的とされたためである。二次的な効果としては、参加者同士の出会いもあったと思われる。

ワークショップ終了後には、参加者が、所属大学における初年次教育の課題解決への道筋を自分の言葉で語るができるようになることを目標に、会場の相互作用が活性されるように進行された。また参加者には主体的な活動をお願いした。ダイアログという対話方法を活用し、各参加者が省察する場を設け、最後に会場全体で初年次教育における教職協働の課題等を共有するプログラムが進められたのである。

キーワード : 教職協働

ワークショップⅡ-B 「アクティブ・ラーニングをデザインする：90分授業のなかにアクティブ・ラーニングをどう組み込むか」

担当者 : 岩井 洋(帝塚山大学)・中村博幸(京都文教大学)

概要 : 近年、高等教育において、「アクティブ・ラーニング」という言葉がよく聞かれるようになった。「アクティブ・ラーニング」(active learning)とは、一方向的な講義形式に代表される「受動的学習」に対して、学生を能動的な学習に参加させる教育手法の総体をさす。しかし、それが具体的にどのようなものであり、それをどのように実践すればよいのかについて、疑問や悩みをもつ教員が少なくない。そこで、本ワークショップでは、通常の90分授業のなかで、アクティブ・ラーニングをいかに組み込み、展開するかについて、まさにアクティブ・ラーニングを実践しながら考えた。

キーワード : アクティブ・ラーニング, 素材, 手法, ファシリテーション, 仕掛け

ワークショップⅡ-C 「どのように初年次教育の組織的導入をはかるか」

担当者 : 濱名 篤(関西国際大学)

概要 : 多数の大学が初年次教育の導入をするようになり、初年次教育自体についての一定の理解は得られるようになってきたものの、どのように教育目標を設定し、どのような体制作りをすればいいのか、どのような人が中心になり、どのような準備やFDをしてスタッフを確保していくのか、どのようにしてプログラム内容を決めていくのか、そのためにどのように教材や方法論を選択していけばいいのか、どのように評価をすればいいのか等、初年次教育のプログラムづくりと組織運営について、参加者に能動的に参加してもらいながらWSを進めた。

キーワード : 組織的導入, 教育目標, FD, 評価

ワークショップⅡ-D 「大規模・研究志向・人文系学部における『基礎演習』の設計と実践」

担当者 : 沖 清豪(早稲田大学)

概要 : 「大規模学部」、「研究志向の教員が多い学部」、そして「文学部・人文学部系」という、初年次教育を実践するにあたり三重苦を背負った学部における実践事例を紹介し、類似の問題を抱えているフロアの意見を積み上げて、一定の展望の獲得を目指した。事例とした早稲田大学文化構想学部・文学部は2007年度の新設にあたり、従来から基礎教育として運営されてきた「基礎演習」「基礎講義」を再編し、初年次教育的性格を強く帯びるものへと転換することが必要であるとの認識が、教職員内で共有された「はず」であった。設置後2で生じた問題を、(1)導入過程における混乱、(2)論文データベースの構築とその活用(の混乱)、(3)学生からの評価、(4)実際の授業風景、(5)運営上の課題(内容の統一、特に添削をめぐる担当教員の負担、職員の活用)を中心に紹介した後、本事例の検討や他の実践例の紹介を通じて、参加者間での建設的な意見交換を実施した。

キーワード : 基礎演習, 大規模学部, 研究大学, 人文系学部, アカデミック・スキル